

ば当にそんな感じでした。此方も暇人、彼方も病院通い以外は暇人ですから、連れだって近隣の法座へ「雨宿り」がてらの居眠り聴聞、そして旨い物巡りの日々が蘇ります。

「不自由の中の自在庵」という表札を掲げた自宅を無住処として、執着の少ない生活道場にしてきた姿が浮かんで来ます。老病死を生きる一つの見本として、今は小生の先達として足下を照らす法灯になっています。「死んでからが本当の人生」とは、今生を迷いの人生と照らし出す法に手を引かれて、今を精一杯生ききる事だと思考するばかりです。

青蓮寺の藤井智さんが愚光さんから託された遺稿を、「のらの念仏詩句・段ボール法語」としてまとめられた綴りノートは、善き人の言葉を伝える善き書だと喜んでます。有り難うございました。
(令和6年11月2日)

愚光さんの思い出

川島弘之

窓辺の仏壇

自在庵の仏壇は簡素なものだった。いちばん奥の八畳間に幅一間ほどの出窓があった。その出窓の棚板に、三つ折り20センチメートルほどの阿弥陀さんの絵像が立てられ、小さな香炉と燭台が置かれていた。絵像の横には至徳院法語。

なるようにしか ならぬだろうが なるようには
必ずなる その成ったところに 全生命を打ち込む
それを正定聚というのである

一日一生

29歳で腎臓の病を得、40年間にわたり透析治療を受け続けた。週に三回、一回6時間。透析をやめることは 死を意味した。血管はすでにぼろぼろだった。

私はわたしであって 私のものではない
人間を超えた大いなる世界から賜ったいのちである

しかし、要介護度4程になっても、決して老人ホームに入ろうとはしなかった。老病死する身を引き受け、老病死する身を見つめ、その身に教えられながら、聞法を続けた。

「無限他力いずれのところにかある。自分の稟受においてこれを見る」(「絶対他力の大道」)。愚光さんにとっては、腎疾患の身体そのものが稟受(天与のもの)だった。疾患の身をとおして、如来の大悲に浴した。「思うようにならざることを楽しまん」という法語を、地で行くような生き方だった。

死んで当たり前の人生を 今日も生かされて生きてゆく
透析室という地獄が私の住家です その地獄に 今日も浄土の花が咲く

不思議な人

愚光さんは不思議な人だった。「死んでから本当の人生は始まる」と言っていた。

この世は雨宿り 我われの本当の仕事は
死んでから始まるのです その日が来るのを楽しみに